

郷土人形づくりをとおした自然と感性のつながりの探求 — 親子の張り子づくり教室の実践から —

Inquiry for New Approach of Nature and Sensibility
in Traditional local Doll making
— The Practice of Papier-mâché making family workshop —

笠原 広一

Koichi KASAHARA
(福岡教育大学幼児教育講座)

(平成25年9月30日受理)

抄録

福島県立美術館で開催された東日本大震災復興支援特別展「若冲が来てくれました」の関連企画「親と子の美術教室 小さな張り子をつくろう！」を担当した。古来郷土人形はその土地の信仰や庶民の願いと結びつき、土地固有の自然の素材やテーマで制作されてきた。今回は7組の親子と福島の伝統的な張り子人形を作った。子どもたちは宇宙や自然、神や生き物といったモチーフで人形を作り、大人は自分のあり方や家族に願いを込めた内容が見られた。子どもは直接的に自然とつながるイメージで制作するが、大人は社会の複雑な問題認識や家族や自分のあり方など、様々な現実と願いの中にイメージを見出していくと考えられる。東日本大震災被災者の郷土の自然や風土に対する気持ちに共感と想像力を寄せるような感性とはどのように育むことができるのか。郷土人形や民芸、芸術との触合いのなかでその土地の先人たちの願いに触れていく、出会っていくという、地域での暮らしの中での長期にわたる取り組みが、求められるという結論に至った。キーワード：民芸、伏見人形、張り子、芸術教育、感性、東日本大震災

1. 親と子の美術教室担当の経緯

今回、福島県立美術館で「親と子の美術教室 小さな張り子をつくろう！」の講師を担当した。東日本大震災の復興支援活動として、伊藤若冲をはじめ、曾我蕭白や長沢芦雪、酒井抱一など江戸時代を代表する画家の名品の数々で世界的に知られるプライスコレクションが、岩手県立美術館、仙台市博物館、福島県立美術館を巡回した¹。巡回作品の中に若冲の「伏見人形図」があり、「布袋さん」(写真1)が7人描かれている。そこで、若冲が描いた京都の伏見人形と福島の郷土人形である張り子に関連させて親と子の美術教室を企画することとなった。筆者が三春張子(福島県三春町)や伏見人形(京都市伏見区)といった郷土人

形の調査を行っていたことから福島県立美術館での張り子による郷土人形づくりで教室を担当させていただくこととなった。

2. 郷土人形について

郷土人形の祖とされる伏見人形は桃山時代から制作が始まったとされる(塩見1967:22)。現在の京都市伏見区にある伏見稲荷大社の参詣路で土産品物として制作販売され、江戸期から大正期に盛んに作られては全国各地に広まった。伏見人形(京都)、堤人形(仙台)、古賀人形(長崎)の三つが三大土人形と呼ばれている。伏見人形は民間信仰や習俗、縁起といった庶民生活に深く結びついている。澤村(2005)は土産(みやげ=宮筒)

写真1：布袋 伏見人形²図1：土鳩 伏見人形⁵写真2：神雛（丹嘉製）⁶

とは神前の祭具であることや、江戸当時、医者に掛かることも薬を買うこともままならない貧しい多くの庶民が神仏の加護にすがらざるを得ないなかで、玩具に魔除けの願いや子を守る親の愛情が込められたとし、郷土玩具の発生は信仰と呪術といった、生活に結びついた宗教性にあったとする。

福島県で有名な三春張子も元々は堤人形の流れ

を汲む土人形が始まりだったとされる。同じく福島県福島市には根子町人形という土人形があった。地理的に仙台市（堤人形）と三春町（三春張子）の間に位置し、双方の影響を受けたが大正期には廃絶している³。以後福島では三春張子や会津の赤べこ（牛）のように張り子が郷土人形の中心となっている。

伏見から全国各地に広がった土人形に加え、地域によっては和紙を使った張り子で作られたり、専門の窯元や工房ではなく農閑期の手仕事であったりと、作られた経緯や背景、内容や素材は地域毎に少しずつ異なる。いずれも当時の地域信仰や習俗、縁起といった生活に深く根ざしたものであった。しかし、江戸期には窯元と販売店で50軒程あった店も塩見の記述（1967）では2軒、現在は「丹嘉」⁴（窯元・販売店）（図1、写真2）一軒のみである。

3. 福島の郷土人形

福島県の中通り地方東部にある三春町では、古くから三春張子という伝統的な郷土人形づくりが行われている。福島県下では小学校図画工作での地域教材として張り子づくりが取り入れられてきた経緯がある。

三春町は自由民権運動や革新的な行政改革の歴史で知られる町である。樹齢千年を越える日本三大桜の三春滝桜も有名であり、全国から多くの観光客が訪れている。

デコ（人形）屋敷⁷と呼ばれる三春張子づくりを行っている地区（住所は隣の郡山市）では張り子を全国に納品しており、東日本大震災で一時中断⁸したが現在は張り子づくりを再開している。三春張子人形の特徴は「紙という材質上、その製法上の利点を最大限に生かし、土人形では表すことが困難とされるような複雑な型を可能とし、さらに扇や刀・弓といった小道具類を附属させるなど、精巧さを高めた」⁹点にあり、最盛期、文化・文政期の三春張子人形の美しさは、あらゆる郷土人形のなかでも屈指のもと高く評されているという。

また、福島県西部の会津地方では「赤べこ（牛）」の張り子が有名であり、赤べこと三春張子は福島県を代表する民芸品として復興支援の取り組みの中で全国に販売されている¹¹。近隣の安達町の手透き和紙を使うなど、地元の自然素材でつくられた三春張子は、山と空、水と空気といった自然に恵まれた福島の郷土が生み出した民芸品であり、全国的にも名高い張り子である。



写真3：汐汲み 三春張子人形¹⁰

京都を中心に近畿地方が全国の郷土玩具の原点といわれるのに対し、東北地方は九州・沖縄と並んで郷土玩具が多くその宝庫とも言われている(齊藤 2000: 20-21)。地域の自然や風土に根ざした文化がその土地の人々の中で豊かに育まれてきた所以であろう。一つひとつの郷土人形には五穀豊穡、家内安全、厄除けなどさまざまな願いが込められている。それは地域を越えた人々の共通する願いであり、それがその土地毎の自然や風土を活かした形で郷土人形となったのである。そこに郷土人形の普遍性と地域毎の味わい深さがあるのである。

4. 郷土の伝統的造形に取り組む意義の再考

美術教育の分野ではこうした郷土玩具は「伝統的造形」として制作活動が行われる。アイヌ民族のムックリ(口琴)や今回の対象地である福島県福島市の伝統的造形である「昼花火」について小学校図画工作での実践研究を行った佐藤(1997)によれば、美術教育において名画鑑賞は行われても、地域の伝統的造形の鑑賞は行われにくいとし、「地域の伝統的造形は、発想やつくり方と同様に造形に込められた人々の願いや文化的な背景などについて調べたり話し合ったりすることを一層取り入れるべき」であるという(1997: 126)。佐藤は地域の文化に根ざした伝統的造形に取り組む教育的意義として次の三つをあげる。

①日常生活の中における造形的価値

日常生活の背景にある文化や、地域の年中行事、身の回りの造形の良さを見直し質的に向上させようとする契機となる。日常生活と造形との関係から美意識が育まれるとし、生活に密着した限界芸術(鶴見 1982)であるとする。

②多文化教育(異文化教育)の原点

地域の伝統的造形を掘り起こすことであらためて地域の独自性を見直す契機になり、他地域との比較から共通点や相違点に気づき、その良さや違いの理解につながる。また、自分が住む地域に対しての自信やアイデンティティの確認、自分への自信になるとする。

③地域における人間形成と学校の活性化

こうした取り組みを通して地域の人々との親しみを増し、学校と家庭・地域の間を深め、子どもの人間形成を支える協力関係を育てていくことにもつながるとする。さらに、工業製品に取り囲まれて育つ現代の子どもにとって、作品がつくられる過程を作者本人から学ぶことができるのも貴重な体験となるとする。

こうした佐藤の主張は今日の学校教育における地域連携の視点においては基盤となる考え方であると言える。また、華々しい海外の名画に対し身近な地域の伝統的造形や郷土人形に目を向けることは一見地味で興味を惹きにくいかもしれない。しかし、それは地域文化と地方の軽視にもつながるとする佐藤の論は、今回の東日本大震災を受けてより自覚的に問わねばならないと考える。

今回滞在した福島では、現在未だ多くの被災者が愛する郷土に住むことも戻りことも出来ず、生活面や精神面、経済面での困難の中にいる。郷土の自然と共に暮らしたいという素朴な願いは、かなえられるのであろうか。自然豊かな福島の大地、空、海に対する深い愛情と畏敬の念に対する共感的想像力が必要である。それは私たち一人ひとりが暮らしているその土地で生まれる感性によるものであるが、やはりそこに共感と想像力の欠如と感性の著しい鈍化を指摘しないわけにはいかない。自然に対する畏敬の念や愛情、感性を育むことを日本の教育は目的の柱に持っている。それだけにこの災害を反省すべき結果と受け止め、感性教育に携わる者としてあらためて地域の自然や風土と共に感じる心を育てる体験のあり方を考え直さなければならないと痛感している。

佐藤は長い歴史の中で受け継がれてきた物づくりの追体験は「素材の性質を生かす知恵」や「こめられた作者の思い」などを「身を以て学ぶことになり理解を一層深める」とし、「日常生活を通して何気なく子どものころから育んできた美意識」が「底辺から人間の行動を支え、価値判断の基準を形成している」と述べる(1997: 134)。

何気なく育んできたものとは、成果がすぐには

測りにくいものである。自然や風土に対する感性とは、厳密に対象化し、その性質を評価することが難しい。だとすれば学校教育のみならず目的合理的なアプローチに限らない場(インフォーマル)と体験の積み重ねをとおして「何気なく醸成される」ことを期すことが重要になる。今回の親子の美術教室はそうした「何気なく醸成される」というスタンスで行われた実践と言ってよいだろう。

東日本大震災の原発事故を受けて、この福島での復興支援特別展での実践は、郷土の自然や風土に根ざした民芸品・郷土人形を見直すことをとおして以下のテーマを抱えていると考える。

- ・郷土の自然と共に暮らすことの意味と日々の暮らしのかけがえのなさを再確認すること
 - ・その土地に生きた先人が人形に込めた思いを想像する
 - ・今を生きる私たちはどんな願いを持ち、張り子づくりをとおして表現し未来に託していけるか
- 復興支援の本展は単に多くの人が展示を観に来てくれることだけが目的なのではない。人と自然の豊かな関係を、そして未来の福島や日本のあり方を問い直す気づきを、これらの先人の作品(表現)から感じ取ってもらうことが重要なのである¹²。そうした議論やコンセプトをふまえて親子の美術教室を準備した。

5. 親子の美術教室の概要

5-1. 企画展と親子の美術教室の概要

展示：「東日本大震災復興支援特別展 若冲が来てくれました プライスコレクション 江戸絵画の美と生命」

2013年7月27日(土)～9月23日(月祝)

会場：福島県立美術館

主催：「若冲が来てくれました」福島展実行委員会、財団法人遠館、日本経済新聞社

関連イベント：親子の美術教室

小さな張り子をつくろう！

日時：9月22日(日) 10:00-15:30

対象：小学生と保護者 10組程度

場所：美術館実習室・企画展示室

材料費：一人につき 200円



図2：展覧会チラシ¹³

5-2. 親子の美術教室の展開

親子の美術教室は以下のように展開した。

- ・始まりの挨拶
- ・レクチャー(伏見人形と張り子について)
- ・制作
紙はり→乾燥→型抜き→貼りあわせ→乾燥
→底面はり→乾燥→下地ぬり
→乾燥(この間に展示鑑賞、昼食、絵付け下描き)
→絵付け
- ・鑑賞
- ・記念撮影(張り子、参加者とブライス夫妻)
- ・終了

10:00 開始前

参加者が全員揃うのを待っている。展覧会が大盛況で道路で渋滞している話などをして待つ。

10:05 開催の挨拶

参加者全員が揃い親子の美術教室開始。國島敏学芸員の挨拶と講師紹介、写真等の記録について美術館や本学での研究目的での使用について協力依頼の説明がある。

10:08 スライドによるレクチャー

伏見人形や張り子づくりについて筆者が実施。

10:20 伏見人形の紹介と作業手順の説明

伏見人形の実物「金魚・鳩」を紹介後、用意した型に和紙を貼り重ねる作業を見せる。水につけた和紙を絞って型に一周するように貼る。重なる部分だけに糊をつけ、一回目の和紙が型に付かないようにする。二回目からは和紙を濡らさず糊を付けて貼り重ねる。全体を3、4回貼り重ねることを説明し、後の工程は追って説明すると伝えた。

10:30 型選び

今回用意した型は9種類で各2、3個用意した。「猫」「犬」「馬」「雀」「鳩」「鯛」「立雛」「富士」「ちょろけん」を元によりデフォルメして紙粘



写真4：会場の様子

土で作った。元になる伏見人形からイメージを広げやすくすることと、短時間での作業に適した形態とした。

これらの型を紹介し、子どもたちに作りたい型を選んでもらった。「どれがいい？」と尋ねると、ポツリポツリと声が出る。希望する型の重複がないように感じたため、「犬がいい人！」などと聞いては手に取ってもらう。子どもは全員が自分の希望する型を手にすることができた。残った型から大人にも選んでもらい、テーブルの道具を説明し、いよいよ制作に入ってもらった。

10：35 制作開始

和紙を貼る作業に集中している参加者。あまり質問も出ず、黙々と作業が進んでいく。途中、何回貼ったかわからなくなった人も何人かいたので、乾燥に入る前に筆者が触って厚みを確認しながら、出来た人からドライヤーで乾燥に入ってもらった。

11：30

大人は3、4回貼って厚みが出ているが、子どもたちは時間がかかっており、厚みも薄いようだ。何人かには、もう一回追加して貼るように伝えた。



写真5：型に和紙を貼っていく様子

ちぎった和紙が小さ過ぎたり、貼り重ねにムラがあるなど、厚みがあるところと、ほとんど型が見えているような薄い箇所もあった。あと一回重ねて貼ろうと伝えると少し疲れたような表情を浮かべる子どももいた。「紙を貼るところが一番大変なところだからね。あとはどんどん出来ていくから頑張って」と励ました。

予定では下地を塗るところまで終わってから昼食休憩に入ってもらう予定だったが、子どもたちはお腹もすいてきたようなので、子どもが作る張り子については、少し薄くても早めに乾燥（と昼食）に進んでもらい、後の下地の乾燥と硬化の時間を多めにとって強度を保つことにした。

11：45

売店でパンの販売を始めたとのアナウンスがあり、早めに昼食をとってもらうように伝え、昼食をとりたい子は先に食べるようにした。

12：00

金魚を作った子がまず乾燥を終えた。紙が薄い所があるのと、金魚の丸い形を上手く作るのが難しいとのことで、筆者が少し手伝い、大きめの乾燥した和紙を上から重ねて強度を増しながら形を整えた。この子の金魚を見本に下地の塗り方を説明し、乾燥が済んだ人から下地を塗り、乾燥させている間に昼食休憩をとってもらうことを伝えた。次第に乾燥が完了し、下地塗りに入る人が出てきた。

13：00

子どもの手伝いをして自分の制作が遅れている大人以外は下地塗りを完了し乾燥に入ったので、筆者も昼食休憩に入った。この間にコピー紙に色鉛筆を使って絵付けの下書きや、張り子の名前やどんな願いをもった張り子にするかなどを考えておいてもらうように伝えた。ただ、名前や願いについては「ちょっとそこまでは考えられるかどうか



写真6：乾燥中の張り子



写真7：下描きの様子

かわからない」といったような雰囲気も感じたので、必ず考えて書くことにはせず、もし出来たら考えてみるといったニュアンスで伝えた。

昼食時に國島敏学芸員とこの点について話した。型が予め決まっているということもあるため、無理に願いを考えるのは難しいかもしれない。もちろん考えてもらえたらよいが、美術館での実技講座の趣旨としては、それを無理に達成させようとして必ず考えなければならないとする必要はないということを確認した。

14:00 絵付け

昼食と休憩を終え、絵付けの説明を行った。下描きを基に色鉛筆で薄く張り子に見当を描き、アクリル絵の具で絵付けを行った。この際に下地が割れたり、へこんでしまったものは下地を塗って補修を行った。

15:00 張り子の写真撮影

絵付けを完了した人は絵の具が乾燥したら張り子の写真撮影を行い、道具を片付け、鑑賞会に移る準備をもらった。

15:30 鑑賞会

この時点で絵付けまで完成していない大人の方



写真8：絵付けの様子

が一名いたが、終了予定時間となったため、途中の段階で紹介してもらうことにし、鑑賞会を始めた。張り子を並べた机を囲んで座ってもらった。まずは筆者から自分の張り子について少し話をし、順次隣の人へと作った張り子についての話を聞いていった。

【筆者制作の張り子】



今回、作例で犬と鳩を作った。鳩の側面の水色、黄緑、黄色、赤の配色は福島県の「イメージデザイン」（次頁図3）に似ている。「福島県の未来の姿を、花にたとえたもので花言葉は『未来』。青は空や海の色、緑は自然や、水や草花でいっばいの街の色、赤は明るい太陽の色、黄は人々の笑い声や温かい心を表す色を表し、この4つが1つの輪になって大きく発展していく姿を表しています」（福島県 HP から抜粋¹⁴⁾）。このデザインコンセプトにある配色とその意味は福島らしさを上手く表していると感じる。



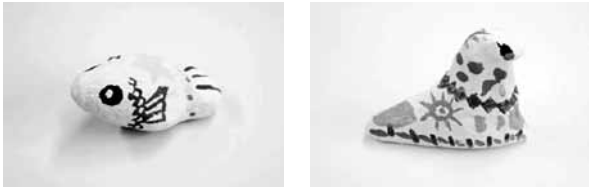
図3：福島イメージデザイン

【親子A】



6年生女子（左図）：鳩を作ったが恥ずかしいと言って詳しく説明はしなかったが、赤い首かざりが描いてある。何種類も下描きをしていた。
母（右図）：小さいハートマークの模様がついた鳩を作った。

【親子B】



6年生女子（左図）：雀の型から魚をイメージして作った。背中に星マークが描いてある。
3年生女子（右図）：鳩の型で作った。太陽や木々の緑、雲や池のような模様など、自然の風景が描いてある。



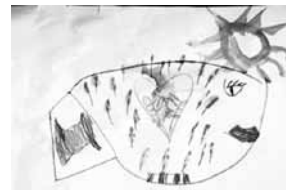
父（左図）：猫の型から虎の子どものような張り子を作った。丁寧につくってあり、まるで本当の土産屋の商品のような出来映えである。
母（右図）：鯛を作った。金運がよくなるようにとの願いを込めたそうである。

【親子C】



1年生女子：鯛を作った。片側（左図）には「くまのおうち」と題して笑顔の熊と家が描かれている。もう片面（右図）には「やまのかみさま」と題し、祠（ほくら）の中に緑色のズボン履いたお地蔵様が描かれている。鯛のヒレを青の縞模様で描き、まつ毛の長い目のキラッとした鯛を作った。下描きも3枚制作し、テーマをしっかりとイメージして作っていたため、下描きも紹介しても

らった（下図）。



魚の絵は、体の中にハートマークがあり、その中に稲が育っている。お米がよく採れますよという願いがあり、この魚が田圃を泳ぎ、お米が沢山穫れるようにしてくれるのだという。お日様も描かれている。



4歳女児：家で猫を飼っており、猫を作った。勢いのある筆遣いで描かれた赤い縞模様がいきいきとした猫の雰囲気を生み出している。素朴な表情を見せる猫である。



父（左図）：仕事の工房名にちなんで馬を作った。
母（右図）：立雛を作った。子どもの手伝いをしながらなので絵付けまではできなかった。夫婦円満の願いが込められた立雛である。絵付けの下描きも紹介した。

【親子D】



母（左図）：鯛を作った。宇宙空間に星や月があり、ロケットが飛んでいる。裏面は完成していないとのことだが、青い大きな円が描かれており、

ジョアン・ミロ (Joan Miró i Ferrà) の絵やニキ・ド・サンファル (Niki de Saint Phalle) の立体作品のような雰囲気を感じる。

4年生男子 (右図)：犬を作った。体に月と太陽、地球、銀河、流れ星が描いてある。全ての存在がこの一匹の犬に象徴されているような張り子である。

【親子 E】



2年生男子 (左図)：金魚を作った。恥ずかしがっていてコメントはせず。お腹が金色に輝いていることや、ふっくらした立体の形を出すことに苦労したが、丁寧に作業を進めたことなどを筆者からコメントした。

母 (右図)：立雛を作成した。今日参加している母と息子の絵柄にしたという。先ほどの夫婦円満のテーマも同様だが、それぞれの願いや思いで立雛の形から発想を広げて作っていたようだ。

【親子 F】



1年生男子 (左図)：犬を作った。「げんき」という名前の犬で、元気になるお守りとしていつも部屋に飾っておくとのこと。

母 (右図)：富士山の型で作った。山の側面には、家族が描かれ、木々も描かれている。家に暖炉があり、その煙が出ている (裏面)。福島市の有名な吾妻山はイメージしなかったそうだが、木々も福島の桃やリンゴがなっている姿にも見えるとのこと。家族が暮らす場所がその土地の自然や風土につながっていることを、この張り子を見ながらみんなで感じる事ができた。

【親子 G】



5年生女子 (左図)：猫の張り子を作った。将来花屋さんをやりたいから、「はなちゃん」と名づけたという。

母 (右図)：「ちよろけん」の型を使ってオリジナルの人形を作った。人形は耳が垂れていて、花を持って目を閉じている。心にゆとりがなくなったときに、このように心の中に花を感じるような気持ち思い出すようにとのことであった。

【大人男性 1】



犬の型を使ってオリジナルの張り子を作った。リーゼント頭で少し困ったような弱々しい表情をした顔が作られている。自分の嫌なところを象徴しているのだという。

【大人男性 2】



馬を作った。体中が綺麗なエメラルドグリーンのような水色で、和紙で耳をつくって貼るなど形を工夫していた。「私は午年ということもあり、昔から馬に憧れがあり好きでした。その馬のように自由に軽やかに、また、豊かに過ごしていきたいと願い空を描きました」(本人談)。

【プライス夫妻のコメント】

張り子を紹介している途中、プライス夫妻が親子の美術教室を見学に訪れた。プライス氏に感想

を求めると、夫人がアメリカであればここでどの作品が一番かの順番を決めるが、日本ではそうはしないのであろうと述べ、プライス氏も、大人は完成度を上げてしまうが、子どもの張り子にはプリミティブな感じがあってよいこと。大人では出せない味であることなどをコメントした。

【鑑賞のまとめ：筆者】



写真9：鑑賞会の風景

伏見人形や張り子もそうだが、郷土の民芸品にはその土地で生きた人々の願いがたくさん詰まっている。それを知った上で、今を生きる私たちはどんな願いやメッセージを後世に伝えていくのかを考えることが重要であることを話した。今日は張り子を作ったが、それぞれの願いが込められたものが出来上がった。ぜひ自宅に飾って時々そうした願いを思い出してみたいと話し、こうした機会をいただいたことへの感謝の気持ちを伝えた。

【プレゼントと記念撮影】

プライス夫妻より若冲コレクションのバッチのプレゼントが子どもたちに手渡され、夫妻を囲んで張り子と一緒に記念撮影を行った。

【終了の挨拶】

國島敏学芸員から終了の挨拶があり、子どもたちから「またやりたい！」との声が上がった。アンケートを各自記入し、張り子を梱包して持ち帰った。

6. アンケートの結果

美術館が作成したアンケートを7組に8枚配布し(1組は夫婦別に記入)、8枚全てを回収した。

6-1. 参加者の実態

参加者数の内訳は表1のとおりである。

表1：参加者の内訳

親子	7組
	子ども9名(男子3名, 女子6名)
	4歳, 1年生(2), 2年生, 3年生, 4年生, 5年生, 6年生(2)
	保護者 9名(男性2名, 女性7名)
大人のみ	2名(男性)
合計	7組(子ども9名, 大人11名)
見学者	2名(小学校教諭:午前) (高等学校美術教諭:午後)

参加者の居住地は「福島市(4), 隣接市(1), 他県(2)」である。過去の福島県立美術館の実技教室受講については「今回はじめて(6)」「今回で(2回位:2名)」であり、体験している人は複数回のリピーターとなっている。この講座についての情報取得は「美術館ニュース(1), 館内ポスター・館内掲示(2), 美術館HP(2), その他(1)」となっている。

6-2. 講座受講後の感想

【楽しかった】

- ・とても楽しかったです。
- ・すごく楽しかった。(子ども)
- ・どきどきしたけどたのしかった。(子ども)

【親子のひととき】

- ・あっという間に時間がすぎてしまい、足りない程でした。親子で楽しいひとときを過ごすことができました。
- ・子どもとゆっくり話したり、作ったりする時間がとれ、有意義でした。

【内容への集中】

- ・出産以来、こんなにひとつの事に集中する時間は初めてで、脳がリフレッシュしました。
- ・とても充実した内容でした。ハマりそうです。
- ・前回5月のワークショップに参加して楽しかったので参加しました。おみやげ等でしかみたことのない張り子で、しくみもよくわかった。子供より大人が楽しんでしまいました。

【その他】

- ・個性ある作品が完成しました。ほかの皆さんの作品も素敵でした。

参加者の感想には「楽しかった」「親子のひととき」「内容への集中」「その他」といったものがある。アンケートは大人が書いたが一部子どもが楽

しかったとわざわざ書いているものがある。親子で楽しく話したり作ったりした時間が有意義であるという感想もある。

今回は子どもと大人も一人一個制作したが、互いに集中して取り組んだことが結果的に満足感の高い体験になったことを学芸員が述べている（後述）。満足感とは「内容への集中」についての感想にもあり、これは全て大人が自身の感想として書いたことである。子育てが始まるとじっくり集中して何かに取り組む時間はとりにくくなる。その中でこうした制作に没頭できる体験は楽しくリフレッシュでき、満足感や充実感が高かったのだろう。だからといって隣で作っている子どもを無視していたわけではなかった。それぞれに集中できる内容だったということである。

「その他」には自他の作品への感想がある。同じ型は最大3つあるため、自分と同じ型からどんな違う張り子が生まれるのかは興味深いものである。1時間半程かかった紙はり作業の段階では、本当にこれが張り子になるのかと不安に思う子もいた。通常は乾燥に何日か間がある作業工程を組むが、今回は5時間半で絵付けまで行うため、前半は生乾き状態での難しい作業があった。それだけに、出来上がってみると以外に大人もハマったというくらいに、完成度も感じさせるような張り子が出来上がり、自他の作品の出来映えに満足感を感じたのではないだろうか。

こうした講座に参加を希望する親子は美術や造形活動が好きであることは確かであるが、好きな人たちがどんなことに満足感を得ているのかや、どんな時間として過ごす楽しさを味わっているのかは、美術館での教育普及活動のみならず、様々な親子の体験活動や子育て支援活動にも共通するヒントがあると考えられる。

今後希望する講座内容は、「作品を作る講座」「制作系」「手作りのもの」といった作品制作を希望する意見と、「親子オブジェ」「又、知らない事を体験したいと思います」といった親子での制作や今まで体験したことのない内容の他、「今回のような工作のような」「もういっかいはりこをつくりたい（子ども）」「またはりこをつくらしてみたい（子ども）」と、特に子どもたちからもう一度張り子づくりをしたいという感想が上がった。講座は長時間で小学校低学年の子どもには難しい作業もあったが、出来上がった後の満足感が高かったのであろう。用意した動物の型も自分なりにイメージを思い描き易かったのかもしれない。

その他「ご意見ご要望」については、「プライ

ス夫婦にも会えて良かったです」「参加させていただきありがとうございます。プライスさんとも一緒に頂きラッキーでした。サプライズ!」「あっという間の一日でした。楽しい時間を有り難うございます」「大学の先生の話が楽しかった。あっという間に一日がすぎました」「ありません（子ども）」と、プライス夫妻と直接会えたことをあげる意見もあり、講座終了後にプライス夫妻も快く記念撮影に応じてくれるなど、美術関係者とのこうした交流もまた大人の楽しみである。美術展だけでなく、制作を媒介に様々な人と交流できる体験もまた美術の体験活動の重要な側面である。

7. 振り返り

終了後に、國島敏学芸員より、参加者の「またやりたい!」と言う声に今回の講座がとても楽しかったということがよく現れていたとのコメントがあった。参加者には作ることが好きな人も多く、簡単な内容であれば大人が飽きてしまう。今回は大人でも集中して楽しめる親子教室であったようだ。最初の伏見人形や張り子のスライド説明は少し長かったが、感想に「大学の先生の話が楽しかった」とあるように、内容は詳しく大人も興味を持ってたようで、制作だけでなく、その背景の理解にも満足感が感じられたのではないだろうか。その分、制作に入る時間が予定より遅れてしまった。乾燥用ドライヤーが電源容量を越えてしまい同時使用台数が半分になり、進行の遅れが予想されたものの、それでも昼食休憩時には展覧会を見に行ってもらった時間もとれた。予定時間を少し過ぎてしまったが、プライス夫妻にも鑑賞会に参加してもらったなどのサプライズもあり、充実した親子の美術教室となった。

8. 張り子づくりと自然と感性のつながりについて

8-1. 美術館という場の特性

郷土人形にはその土地の自然や風土に根ざしたメッセージが込められている。その点で今回の張り子づくりにおいては若沖にちなんで伏見人形から型を選んだが、型の形成においてはよりディフォルメして、参加者が福島にまつわるイメージを投影しやすいようにした。もちろん参加者は福島在住者ばかりではないが、こうした郷土人形に込められた願いやメッセージ、地域性についてスライド説明で言及し、こうした点に関連させてイ

メージしてもらえたらと考えた。

しかし、美術館での実技講座の趣旨を考え、必ずこれらの要素を盛り込んで下描きを書かなければならないとはせずに行った。明確な目的とねらいの効果的な達成にあまり重きを置かずに行った。美術作品や参加者相互、プライス夫妻などの様々な出会い、家族との過ごし方、ゆったりとした時間など、教育の場であるという以前に人々の暮らしやまちの中にある一つの文化的な出会いの場であるというオープンで多義的な特性を大事にした。

8-2. 張り子のテーマや願い

では、自然とのつながりを感じる感性とは張り子づくりにおいてはどのように浮かび上がってきたのであろうか。参加者の張り子のテーマや願いを下表2に整理した。

表2：張り子のテーマとカテゴリー

【子ども】		【カテゴリー】
鳩	赤い首飾り	—
鳩	太陽、木々、雲、池の絵	自然の風景
魚	星マーク	宇宙
鯛	熊とお家、お地藏様	生き物、神様
猫	家で猫を飼っている	身近な生き物
猫	将来の花屋さんの夢	将来の夢
犬	宇宙、地球、星、月、流れ星	宇宙
犬	元気のお守り	お守り
金魚	—	—
【大人】		【カテゴリー】
鳩	ハート	—
虎	—	—
鯛	金運の願い	金運願い
鯛	宇宙、星、月、ロケット	宇宙
馬	仕事の工房名	—
馬	馬のように自由軽やかさを願う	自分のあり方
立雛	夫婦円満を願い	家族（夫婦）
立雛	母と息子	家族（親子）
犬	自分の嫌なところ	自分のあり方
富士山	幸せな家族の姿	家族
ちよろ	心にゆとりと花を持つ願い	自分のあり方

スライド説明では伏見人形を幾つか紹介し、その願いや由来を説明した。下描きをする際にも、可能であれば自分なりの願いやテーマを考えてみてほしいと伝えている。必ずしも自然に関連させた願いやテーマを設定すること必須とはしなかったが、子どもと大人も含めて、いくつかのカテゴリーが生成された。作品の情報が少なくカテゴ

リー分けが難しいものは「—」と記入した。

子どもの作った張り子では、「宇宙 (2)、生き物 (2)、自然の風景、神様、将来の夢、お守り、不明」となっている。

大人の作った張り子では、「自分のあり方 (3)、家族 (3)、宇宙、金運、不明」となっている。

子どもたちは宇宙や身近な生き物、神様、夢、お守りなど、イメージが宇宙から身近な世界や自分の気持ち（元気がでる）まで様々につながっている。大人には宇宙や生き物、自然の風景といった自分（人間）以外の存在へのイメージは少ない。大人は自分のあり方に何かしらの捉え直しや戒めを想起させる象徴として張り子を作る視点がある。また、純粋に金運や土産物の張り子のような作品としての制作も見られる。このあたりは大人ならではのイメージの持ち方であり、楽しみ方であろう。

9. 考察

子どもは様々な型を使いながらも、人間以外の存在（宇宙、自然、生き物、神様）にイメージを寄せて張り子を作った。大人は家族や自分のあり方に願いや関心が高いようだ。もちろん今回のサンプル数は少ないため、これを一般化することはできない。しかし、子どもは比較的、観念的なイメージ世界との対話に入りやすく、大人はより現実的な家族や自分という存在との関わりのなかでイメージしていると言えそうである。だとすれば郷土人形づくりをとおして自然とつながる感性とは、子どもは直接的に自然にまつわるイメージを想像し、大人は家族や自分という存在の基盤としての土地の自然や風土といった、より複雑な形での想像によってイメージが自然とつながる可能性がある。大人は知識や情報があるため、自然と言っても直接的に自然を対象化することは掴みどころが得にくいのではないだろうか。複雑な社会生活のなかで自然はより間接的な生活要因となっているのかもしれない。

先に、東日本大震災で郷土の自然や風土に対する共感や想像力の欠如と、感性の著しい鈍化を指摘した。幼児教育や学校教育では様々な機会と方法で自然の大切さや自然とのつながりを感じるための教育実践が行われている。それにも関わらず大人になるとそうした自然を愛する人々の気持ちは、様々な社会的利害関係に吞まれてしまう現実がある。素直に自然や人間以外の存在にイメージがつながる感性を持った子どもたちが、大人になる過程で現実のリアルな問題を認識するようにな

るとしても、どうすれば自然を素朴に感受する心を失わずに大人になれるのだろうか。

今回のように子どもと一緒に取り組む活動の中で、子どもの感性に触れることで思い起こさせてもらうことが重要なのではないかと思う。先人たちが郷土玩具や土人形といった子どもに手渡す文化（財）に願いやメッセージを込めたことには大きな意味がある。子どもへの贈り物は未来への願いが詰まっている。それを飾り、機会ある毎に家族で愛でるときに、子どもたちへの愛おしさに加え、自然や風土への畏敬の念や愛情を思い起こし、その土地の自然と共に暮らす日々の有り難さを感じることができる。郷土人形はその象徴であり文化装置なのかもしれない。大人が子どもに人形の形をもってそうしたメッセージを与えるのは、それと戯れる目の前の子どもの健やかな育ちに目を細める時に、忘れてはいけない大切な先人の願いやメッセージを再び思い起こせるからなのではないだろうか。子どもたちが幸せに過ごせる姿を人形は思い起こさせてくれる。郷土人形はいつの時代もそうした親の願いが込められているのであり、そうした願いに形を与えた芸術なのである。

確かにいつの時代も子どもは大人や社会のあり方に大きく規定されて存在してきた。しかし、現代社会はこうした子どもに対する大人の願い以上に、大人の欲望や利害の対象とされている。願いを自分の中に感じることを以上の早さで、経済合理性が人々を席卷する。そんな状況の中で何が大切かを語ることや理念を考えることは、何の力もないように思えてしまう。しかし、佐藤が述べるように、「日常生活を通して何気なく子どものころから育んできた美意識」が「底辺から人間の行動を支え、価値判断の基準を形成している」(1997: 134)ということを経営教育の取り組みの基礎にあらためて据えなければならないと思う。たしかに短期間で効果的な認識と行動変容を生む方法もあるだろう。しかし、郷土人形や芸術といった文化は、認識と行動変容のための教材や手段として第一義的に存在しているわけではない。何百年というその土地の暮らしの中で培われてきた文化である。それに「何気なく」「子どものころから」接することで「育んできた美意識」とは創られるのである。そうした「感性の何気ない育み方」が見直される必要があるのではないだろうか。それは今回の実践のように親子が暮らしのなかで共に体験する出来事のなかで、まさに「何気なく醸成される」ものであると言えよう。

10. さいごに

振り返ると今回の張り子づくりは、幼児教育や学校教育での美術教育ともまた違った、まさに「何気なく育む美意識」という視点で行われた実践であったように思う。教育とは意図的な営みである以上、「何気なく育む美意識」が教育の文脈においてどのように扱おうのかは多分に検討の余地がある。しかし郷土の自然や風土を感じる感性を育み、自然を愛し大切にすることについては大なる反省が必要であるだけに、これまでのアプローチとは異なる方法も模索されねばならない。それは短時間で結果が見えないが、しかし長期間をかけて「何気なく醸成される」ものなのかもしれない。「何気なく育む美意識」とは言っても、全てが曖昧でぼんやりしているわけではない。

今回の親と子の美術教室は5時間半ほどの一回限りの活動であるが、学校教育と比べて連続性と積み上げがないと批判するべきものではない。なぜなら、こうした地域の暮らしになかにある芸術との出会いは、その人の暮らしと人生の連続性の中には確かに位置づいているのである。学校教育と美術館との連携の重要性の一方で、それぞれが持っている固有の目的と文化的・教育的営みには違いがある。自然とのつながりを感じる感性を、郷土人形や民芸、芸術との触合いのなかで育もうとするならば、「何気なく育む美意識」が、「何気なく醸成される」という現象も十分に視野に入れた気の長い歩みが積極的に行われる場の特性が肯定されなければならないだろう。それが可能となるための方途を探ることは今後の課題である。

今回、東日本大震災復興支援の企画において郷土人形をテーマに取り組んだことからこうしたことを考える機会をいただいた。先人たちが大切に守り育んできた自然を大きく損ねたことの自覚を持ち、その土地に暮らす人々の気持ちにいかにか共感と想像力を寄せることができるのか。復興支援とは直接的支援に限らない。こうした問題をより深く捉え、根源的に乗り越えられるような方策を考えて着実に実践に移していくこと。この教訓を着実に未来に反映させる努力が、離れた土地にいる人間ができる最大の支援ではないかと考える。

全国各地、そして世界中のその土地において、地域の伝統的な造形や郷土人形などの民芸を見直すなかで、その土地に生きた人々の願いやメッセージを受け止め、自分たちの世代が今なすべきこと、次の100年、200年先の子孫に胸を張って伝え残していきたいものは何なのかをぜひ考え

ていきたいと思う。現に今回紹介した郷土人形は200年以上昔のものもある。私たちの手仕事は世代を越えたメッセージとなる。私たちが郷土人形やプライスコレクションの江戸絵画の数々に触れることの意味は、こうした過去を生きた人々の作品を通じた出会いであり対話でもあるのである。

今回、子どもたちとの張り子づくりから沢山のことを教えてもらった。今後は子どもたちの感性を育む教育実践と研究を進めると同時に、大人の感性や美意識の問題についても併せて考えていきたい。

謝辞

親と子の美術教室の実施に際しては福島県立美術館の皆様にご多大なるご協力を頂きました。張り子人形の調査では三春町歴史民俗資料館から資料をご提供いただきました。そして福島市内、福島県外各地からご参加いただいた親子の皆様、郷土人形づくりをとおして郷土のよさを再発見し、これからの未来に向けて共に願いを形にする機会をもつことができたことにあらためて感謝申し上げます。そして、ぜひとも福島に一日も早く、ごく当たり前の日常が戻りますように。

※この研究は「平成25年度福岡教育大学学長裁量経費プロジェクトによる助成を受けたものである。

註

¹ 仙台市博物館 2013年3月1日～5月6日、岩手県立美術館 2013年5月18日～7月15日、福島県立美術館 7月27日～9月23日の期間で被災3県を巡回。

² 図版「布袋」伏見人形高槻市立しろあと歴史館編「しろあと歴史館春季特別展 伏見人形とその系譜～奥村寛純コレクション展～」(2007)高槻市立しろあと歴史館8頁より転載。

³ 三春町歴史民俗資料館編「みちのくの古人形」昭和59年度春季特別展図録 三春町歴史民俗資料館編 82-84。

⁴ 丹嘉 <http://www.tanka.co.jp/base.htm>

⁵ 図版「土の鳩」(京都府・福岡県)清水晴風西澤笛畝(2009)『日本のおもちゃー玩具絵本『うなゐの友』より一』美術書出版株式会社芸亭堂18頁より転載。

図版解説：「京都の三宅八幡の土鳩は子どもの痢の虫封じに効くという。筥崎八幡宮の鳩笛およびムク鳥笛は博多や津屋崎あたりで作られたものである。」同頁より。

三宅八幡の土鳩は現在も丹嘉製である。今回、伏見人形の実物として筆者所蔵の土鳩を紹介した。

⁶ 図版「神雛」(丹嘉製)伏見人形

高槻市立しろあと歴史館編 前掲書12頁より転載。

⁷ 高柴デコ屋敷

<http://www.dekoyashiki-daikokuya.com/item/k-tora01/>

⁸ 三春町と郡山市東部は東京電力福島第一原子力発電所から西に約45～50kmに位置している。

⁹ 「三春張り子人形」(1991)『ふるさとの人形たち』三春郷土人形館122頁。

¹⁰ 図版「汐汲み」三春張り子

三春郷土人形館編 前掲書125頁より転載。

¹¹ 代表的なものとして下記サイトを紹介。

(有)荒井工芸社 <http://akabeko.aizunet.com/>

野沢民芸 <http://www.nozawa-mingei.com/>

東北復興支援赤べこプロジェクト展

<http://akabekoproject.com/>

¹² この点について、同展覧会コレクション所有のプライス夫妻は以下のメッセージを寄せている。「2011年3月、TVジャパンの緊急放送で私たちは東日本大震災のニュースを知りました。数十分後、津波が押し寄せるのを見て私たちは体が硬直し、放心状態になってしまいました。

災害が起きてから数週間後、テレビに映された梅の花にそれまで硬直していた身も心もほぐれ、泣き崩れてしまいました。一面灰色の瓦礫の中で咲いたあの色鮮やかな梅の花の美しさは一生忘れることはないでしょう。また私たちは、避難所で配られたおにぎり1個に「ありがとうございます」と頭を下げられておられた東北の人々に美しいものをお見せしたいとの思いに駆られ、尊敬してやまない辻惟雄先生に連絡をとりました。

この展覧会は多くの人々や機関の善意によって開催され、すべての収益が東北にもたらされます。数えきれないほど多くのご家族を亡くされた方々、ペットや家畜を失われた方々をどのように慰めたらいいのか言葉もありません。しかし日本人の先達が残してくれた楽しく、美しく、格調高い江戸絵画が一人でも多くの人々の心の支えになってくれば、私たちは大変うれしく思います。そして被災された方々が苦しくとも勇気を持って一歩ずつ進み、幸せを取り戻せますよう、心から願っ

ております。」(プライス夫妻からのメッセージ)
「特別展 東日本大震災復興支援 若冲が来てく
れました プライスコレクション 江戸絵画の美
と生命」オフィシャル HP より。http://jakuchu.
exhn.jp/messages.html

¹³ 「若冲が来てくれました」福島展チラシ

¹⁴ 福島イメージデザイン

(http://wwwcms.pref.fukushima.jp/pcp_portal/PortalServlet;jsessionid=51507A378748A876CEB7FA2202F438DC?DISPLAY_ID=DIRECT&NEXT_DISPLAY_ID=U000004&CONTENTS_ID=14558)

文献

- ・木立雅朗 (2011) 「新発見 本町下高松通出土の伏見人形土型について」第 229 回京都市考古資料館文化財講座.
- ・斉藤静夫 (2000) 「紙による民芸的な郷土玩具」『研究紀要』(30) 聖園学園短期大学 19-35.
- ・佐藤昌彦 (1997) 「地域の伝統的造形と鑑賞教育: 小学校における昼花火の実践と理論的考察」『美術教育学』美術科教育学会誌 (18) 125-136.
- ・澤村英子 (2005) 「郷土玩具にみる色彩表現の特質について」『山野研究紀要』(13) 山野美容芸術短期大学 25-32.
- ・塩見青嵐 (1967) 『伏見人形』河原書店.
- ・清水晴風 西澤笛畝 (2009) 『日本のおもちゃ—玩具絵本『うなゐの友』より—』美術書出版株式会社芸艸堂.
- ・外山徹 (1999) 「福島県東部地方の伝統的工芸品に関する実態調査報告—大堀相馬焼・三春駒・三春張子について—」 「福島県東部地方・岐阜県高山市の伝統的工芸品に関する実態調査報告—大堀相馬焼・三春駒・三春張子／飛騨春慶・洪草焼—」 明治大学博物館研究布告 第四号 105-131.
- ・高槻市立しろあと歴史館編 (2007) 「しろあと歴史館春季特別展 伏見人形とその系譜～奥村寛純コレクション展～」高槻市立しろあと歴史館.
- ・鶴見俊輔 (1982) 『限界芸術』勁草書房 7-8.
- ・三春郷土人形館編 (1991) 『ふるさとの人形たち』三春郷土人形館 122.
- ・三春町歴史民俗資料館編 (1984) 『みちのくの古人形』昭和 59 年度春季特別展図録 三春町歴史民俗資料館編 82-84.
- ・民藝編集委員会編 (2011) 『民藝 特集 日本の古人形』民藝編集委員会 2011 年 1 月号 (第 697 号)

※親と子の美術教室での会場風景や参加者の作品写真は筆者撮影。